

# 時事新報

第三千六百三十九號  
 明治二十六年四月廿六日 (癸巳)  
 水曜日  
 本報發行所 東京市本町三丁目  
 電話 二二二二  
 代印所 東京市本町三丁目  
 電話 二二二二  
 西曆一千八百九十三年

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり

時事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

## 地方視察員の派出

市町村制府縣制の實施あり地方自治の制度漸く行はれて各地の政況を一變し教育衛生の事も漸次緒に就き殊に殖産の一事に至れば實に驚くべきの進歩を現し銀行會社製造所等其面目を一新し各地の産業發達として隆盛の域に進む最近二三年間地方長足の進歩は實に世人の意外にあり本報は遂に全國各地に通信員を設けて是等地方の政況を紙上に掲げ細大漏す所なきを期すも未だ之を以て満足する能はず絶えず社員を各地に派して詳かに其狀況を探り以て殖産世界に利益する所あらんと欲し過般來計畫する所あり頃日準備既に整頓したれば今後は時々社員を各地に派出して地方の政況を始め農工商各業の狀況を紙上に報道し讀者をして坐ながら各地進歩の實況を詳知せしむるを期す而して今や重要貿易品の一たる製茶の季節に向ひたるを以て地方狀況視察の第一着手として社員伊澤良立氏を産茶地方に派し其狀況を探らしむる事と爲し氏は昨日を以て其途に上り先づ静岡縣下の茶況を視察し夫れより熱田を経て四日市に出で三重縣下の製茶地方を巡覽し更に江州に出で製茶業を調査し諸途名古屋其他沿道の地方に於ける農工商業の實況を探り日々之を本報に報道する筈なれば該地方の模様は今後十數日の時事新報紙上に躍出すべし

二十六年四月二十二日 時事新報社

## 時事新報

### 富豪家と宗教

今の文明果して眞の文明なりや否やは言ふを須ひす所謂文明の我國に進歩したる以來人心ます一宗教と離隔して殆んど相離せず宗教のみは一切無頓着なりと云へば恰も卓見なるが如く信仰なきは愚夫愚婦の痴情として故らに排斥する者少なからず滔々たる半信者流に在れば徒に人の手前を氣取るものとして深く咎むるに足らざれども歴々たる富豪大家の身を以て亦これに倣ひ宗教の如きは眞宗なり神道なり釋教なり吾に於て擇む所なしと稱し大切なる奉養にも唯時の便宜に従ひ或は佛事し又或は神事して勝手に神佛を混濁し其平氣なるを以て得意とするもの我輩の屢々見聞する所なり左れば其奉養を華美にするも唯漫然時勢の流行を追ふて豪華を競ふのみ敢て神社佛閣に兼財を蓄積して祖先の冥福を祈るにも非ざれば亦自から宗官に身を固めて後生を慮ふにも非ず隨て神佛も弘布の力に失ひ奉世漸く無宗教の域に陥らんとするは正に今日の實況なるが如し蓋し信仰は人々の心にあるべきなれば他より強て促す可きにあらずれども富豪大家の宗教に冷淡なるは其財産保護の爲めに果して得策なる可きやと云ふに我輩頗る危ぶる所なき能はず抑も財力なるものは單に財力のみにして其用をなす可らず之に財力を加へて始めて實を造る可し昔の經濟學者は専ら財力に重きを置き勢力は需要供給の原則に従ふ一の物品と視做

## 官報

○司法省令第七號  
 明治二十三年十月(司法省令第八號第十條第三項中「新聞紙ナキトキハ」ノ下ニ「所轄地方裁判所管内ニ於テ發行スル新聞紙ヲ以テ公告ヲ爲シ又ハ」ノ二十九字ヲ加フ  
 明治二十六年四月二十五日 司法大臣芳川顯正

○八代海軍大尉の經過地 近來軍人の壯圖を企つるもの少からざる中にも福嶋中佐の騎馬旅行、郡司大尉の北征隊は世傳へて以て双美と爲し懦夫も之を聞いて起たんとするの有様なるが圓らざるが今又海軍に一の北地探險者を出せり其人を誰れぞと云ふに數日前の本紙に悉く歸朝したる處を報せし八代海軍大尉にして大尉は一兩年前所用ありて露國の浦羅斯德に赴きしが序でながら其最寄の地方を巡見せんと思ひ昨年九月三十日エモリオフ汽船會社のバイカルに乗込み浦羅斯德を發し途中亞米利加灣ナホドカ港に立寄り其翌日即ち十月一日を以てオラガ港に達し同日午後サガレン島のコンラコフに向て直航し夫より輕便海峽を北上して途中アレサンドロオケスタに立寄り十月七日の午後黒龍江口のエヨライプスタ府に着し翌日黒龍江汽船會社の川舟に乗り代へ黒龍江を溯りて十月十二日ハボロスカ府に着し運河水結の期を待ち同府に留まるるを二箇月、其間にコンラコフに面會し十月十日同府を發し樺太に上り十月十八日奧朝陽の第五隊に連し陸路馬車にて西比利亞鐵道の線路を爲るべき進筋を巡見し二十二日ニコリスタに着し留まるる數日、二十八日該地を發し東に向て進み百露里、三十日の午後アモチノに達し同地に於て案内者を雇ひ騎馬にて出發したる處山中人家なく雪中に露宿すると六日間にして漸くスーチャン殖民地の極北フロロフカに本年一月六日を以て達し翌七日ノゾグツカ村に着す(此村は最初大尉が出發の際立ち寄つたるナホドカ港より内地の方に入り込みたるスーチャン沿岸の一村にして即ち大尉は初め海路よりニコライプスタ府に到り夫れより黒龍江を溯りハボロスカ府を経て陸路進路に就き以て此村に達したる者なれば丁度其邊を一周したるものと知るべし)翌八日近頃同地に發見されたる石炭坑を巡覽し再びノゾグツカに歸り翌日同地を發してスーチャン河口のウラデーロフカに着し十日を以て同地を發し十三日悉く浦羅斯德に歸り

十數日間同地にスーチャンの氷上を下りしホシエリ豆滿江を涉り府に達し夫より南雪等を越え雲南に距る輪浦浦に進より陸路南に進山等を経て本報たる處大略右の處二百日に垂身身孤劍異域のりど謂ふ可し

○英人フオ氏は已に本紙氏と共に去る廿中なるが同氏はするは疑ひも無んどせば必ず佛を有し此度の上る由又滯京中に究じ且つ萬國宗も議を盡したる連日マコ市に對して佛教の對して佛教の

○初大尉 北見日大尉釣船出漁みれど同地方より二箇月なりし

○餅漬 青森縣が本年は殊の外が擧期日 秋したるため縣會言去る十九日同

○有志會 官報第四號會中上仙臺市の把軍館

○郡司大尉 宮小高を出發した降雨のために其

○憲法扶斯 宮一月以來去る二

○醫會 栃水縣合して同會規約

○千福 千葉縣農家にて苗代用

○千福 千葉縣農家の如きは長柄位なれば其價一圓に二杯